

第3回 農林水産政策研究所農業・農村構造プロジェクト・センサス分析成果報告会

プロジェクト研究資料
本文 (pdf) はこちら



有機農業の実施状況に関する分析

農業経営体の規模との関連性に焦点を当てて

報告資料

掲載ページはこちら



2024年2月20日

農林水産政策研究所
農業・農村領域

楠戸 建

目次

1. はじめに

- (1) 有機農業とは
- (2) 国内の有機JAS認証の推移

2. 2020年センサスにおける有機農業の把握方法

- (1) 把握方法
- (2) 概要

3. 有機農業を実施する農業経営体と経営規模との関連

- (1) 経営耕地面積との関連
- (2) 作物別の作付（栽培）面積との関連
- (3) 農産物の売上規模別の有機農業の実施状況

4. おわりに

- (1) まとめ
- (2) 今後の展望

1

はじめに

背景

- ✓ SDGsの実現や、環境に配慮した持続的農業経営実現の重要性が高まる
- ✓ **みどりの食料システム戦略**：
2050年までに（中略）耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を25%（100万ha）に拡大することを目指す。



有機農業の拡大に向けた効果的な取り組みには、まず現状の適切な把握が重要



2020年農林業センサス（農業経営体調査）で有機農業の実施状況を把握。

(1) 有機農業とは

有機農業

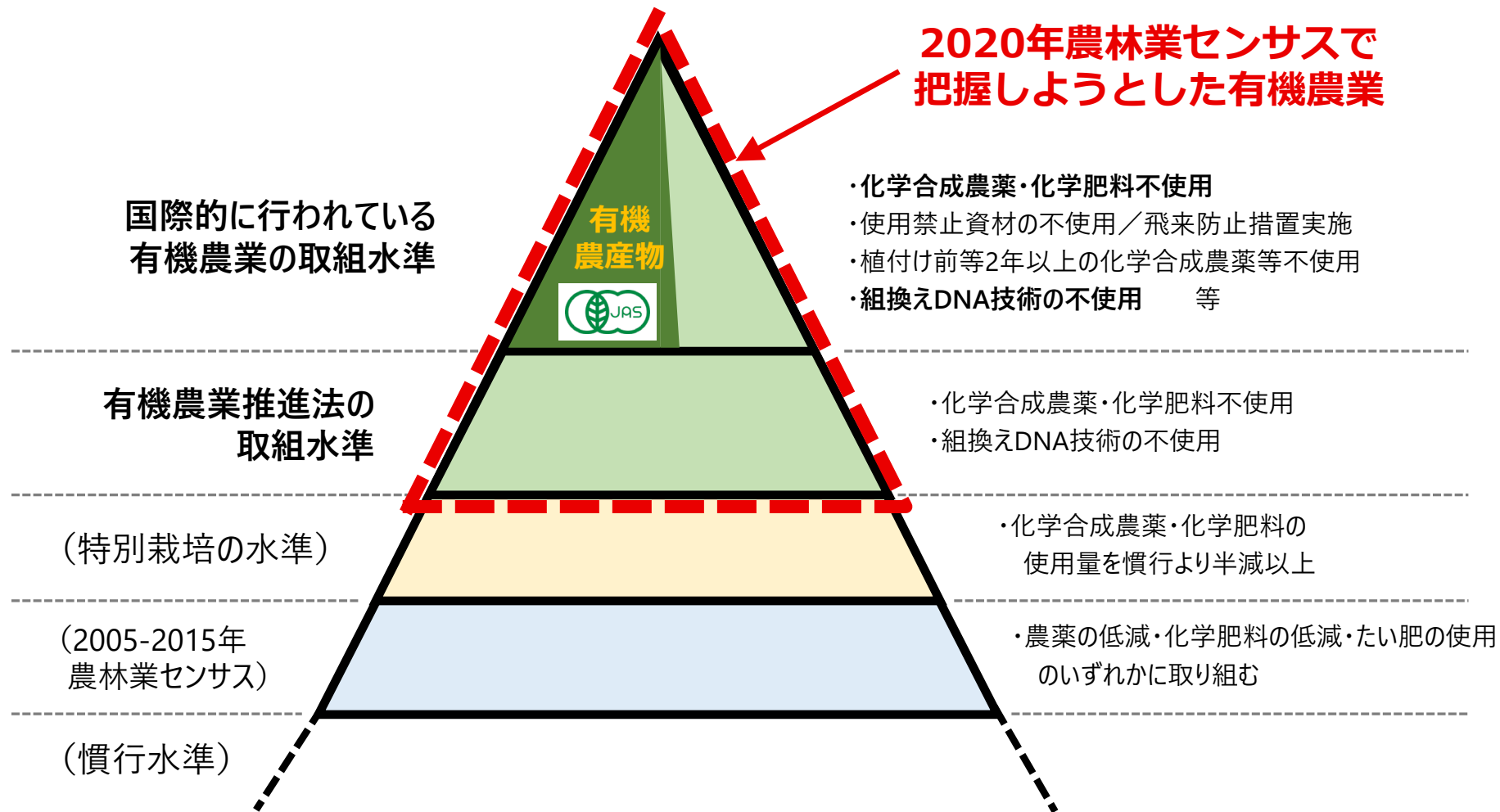
「化学的に合成された肥料及び農薬を使用しないこと並びに遺伝子組換え技術を利用しないことを基本として、農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した農業生産の方法を用いて行われる農業」と定義（『**有機農業の推進に関する法律**』）。

有機農産物

化学的に合成された肥料及び農薬の使用を避けることを基本として、土壌の性質に由来する農地の生産力を発揮させるとともに、農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した栽培管理方法を採用したほ場において、

- ①周辺から使用禁止資材が飛来し又は流入しないように必要な措置を講じていること、
- ②は種又は植付け前2年以上化学肥料や化学合成農薬を使用しないこと
- ③組換えDNA技術の利用や放射線照射を行わないこと

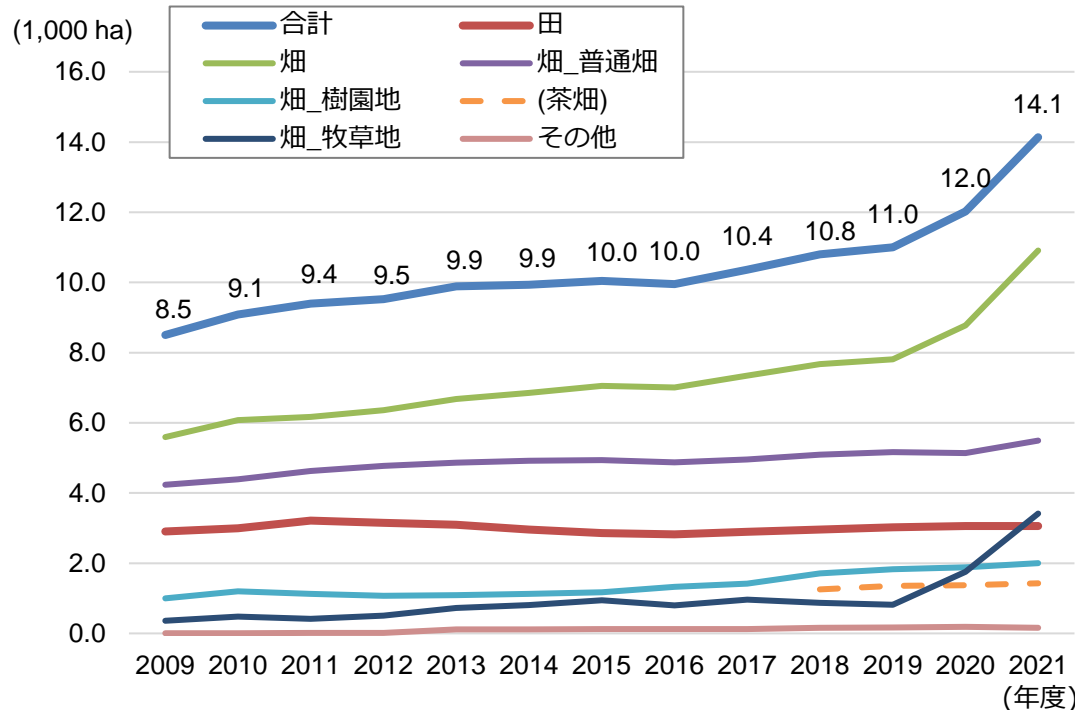
などの基準に従って生産された農産物のこと（『**有機農産物の日本農林規格**』）。



資料：農林水産省（2021，2023）等を参考に報告者作成。

(参考図A 2020年農林業センサスにおいて把握しようとした有機農業)

(2) 国内の有機JAS認証の推移



資料：各年度『国内における有機JASほ場の面積』より報告者作成。

注. 茶畑は、2017年度まで樹園地の一部として把握。
また、2018年度以降の樹園地のデータは、茶畑を足し合わせたもの。

第7-1図 有機JASほ場面積の推移

✓ 有機JAS認証ほ場は、おおむね毎年増加し、2020年度には12,027ha

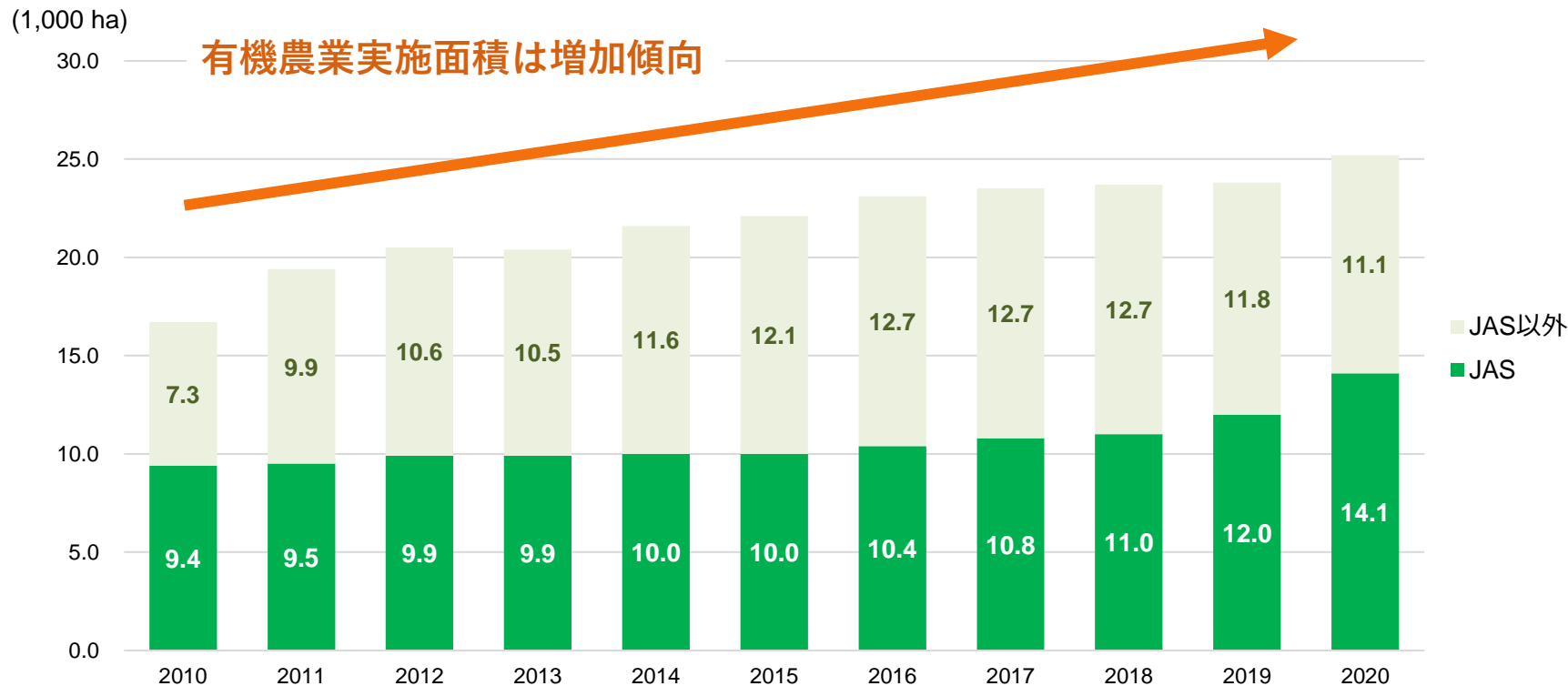
✓ 田が25.5%、畑が73.0%、
その他が1.5%（2020年度）

✓ 近年拡大しているのは畑で、
特に樹園地が2014年度以降拡大

✓ 牧草地在1年で2倍以上に拡大
（この増加のほとんどは北海道）
815ha（2019年度）
→ 1,756ha（2020年度）

✓ 有機JASのデータが日本の有機面積の統計として公表（Willer et al., 2023）。

有機農業実施面積の推移（JAS以外を含む）



資料. 農林水産省（2022）『有機農業をめぐる事情（令和4年7月）』.

注. 上記資料では、JAS面積データは、翌年度のデータが該当年のデータ（2021年度=2020年）として記載.

（参考図B 有機農業実施面積の推移（JASを取得していないほ場を含む））

2

農林業センサスにより把握された 有機農業の実施状況

(1) 把握方法

- ✓ 農業センサスの農林業経営体調査により聴取された有機農業は、「化学肥料及び農薬を使用せず、遺伝子組換え技術も利用しない農業のことで、減化学肥料・減農薬栽培は含みません。また、自然農法に取り組んでいる場合や、有機JASの認証を受けていない方でも、化学肥料及び農薬を使用せず、遺伝子組換え技術も利用しないで農業に取り組んでいる場合、有機農業に該当します。なお、販売を目的とせず自給用のみに作付けした（栽培した）場合は含みません」と定義。

3 有機農業に取り組んでいますか。取り組んでいる場合は、取り組んでいる面積を品目別に記入してください。

取り組んでいない	<input type="text" value="0"/>
取り組んでいる	<input type="text" value="0"/>

		(ha)	(a)
		(町)	(畝)
水 稻	704	8	8
大 豆	705	8	8
野 菜	706	8	8
果 樹	707	8	8
その他	708	8	8

有機農業とは、化学肥料及び農薬を使用せず、遺伝子組換え技術も利用しない農業のことで、減化学肥料・減農薬栽培は含みません。

なお、自然農法に取り組んでいる場合や有機JASの認証を受けていない方でも、化学肥料及び農薬を使用せず、遺伝子組換え技術も利用しないで農業に取り組んでいる場合、有機農業に該当します。

なお、販売を目的とせず自給用のみに作付けした（栽培した）場合は、含みません。

第7-2図. 2020年農林業センサス（農林業経営体調査）における有機農業に関する質問

(2) 概要

第7-1表. 各品目別の有機農業実施経営体数と作付面積

参考：対応する有機JASほ場面積
(2020年度)

	経営体数 (経営体)		作付(栽培) 面積 (ha)		
	有機あり	(率)	有機面積	(率)	
農業経営体計 ⁽¹⁾	1,075,705	69,309	115,269	...
水稻(食用) ⁽²⁾	713,792	35,244 (4.9%)	1,285,654	60,624 (4.7%)	
大豆	49,731	2,862 (5.8%)	132,084	5,122 (3.9%)	
野菜	282,543	24,647 (8.7%)	264,734	18,435 (7.0%)	
果樹	172,528	12,750 (7.4%)	126,819	9,630 (7.6%)	
その他	...	6,598	21,458	...

田：3,063ha
普通畑：5,141ha
樹園地：509ha
茶畑＋牧草地＋その他： 3,314ha

資料：2020年農林業センサス。

注. (1) 農業経営体計の経営体数は全経営体数（作物は問わない）。

(2) 水稻（食用）は陸稻及び水稻（飼料用）を含まない。

センサスと2020年度の
有機JASほ場面積（12,027ha）を
単純に比較すると**約10倍**の開き。

この差を生む要因は？

① 農林業センサスで聴取している有機農業は、自然農法やJAS有機の認証を受けていない有機農業も含む

→ 農林水産省（2020）の「有機JAS認証を取得していないが有機農業が行われている農地」を合わせても、23,700ha（2018年）程度で、その差の一部しか説明できない。

② 農林業センサスの有機農業の実施面積は、のべ作付面積で把握

→ 特に野菜等において、同一ほ場（または施設）で複数回作付けが行われている場合に、両者の差が大きくなる。

③ 回答者である農業経営体の想定する有機農業が、かなり広範な環境保全型の農法として捉えられている可能性（農林水産省，2022）

→ 特に田（水稲）において有機JASほ場面積との乖離が大きくなっていることから、この部分の影響が大きいことが推察される。

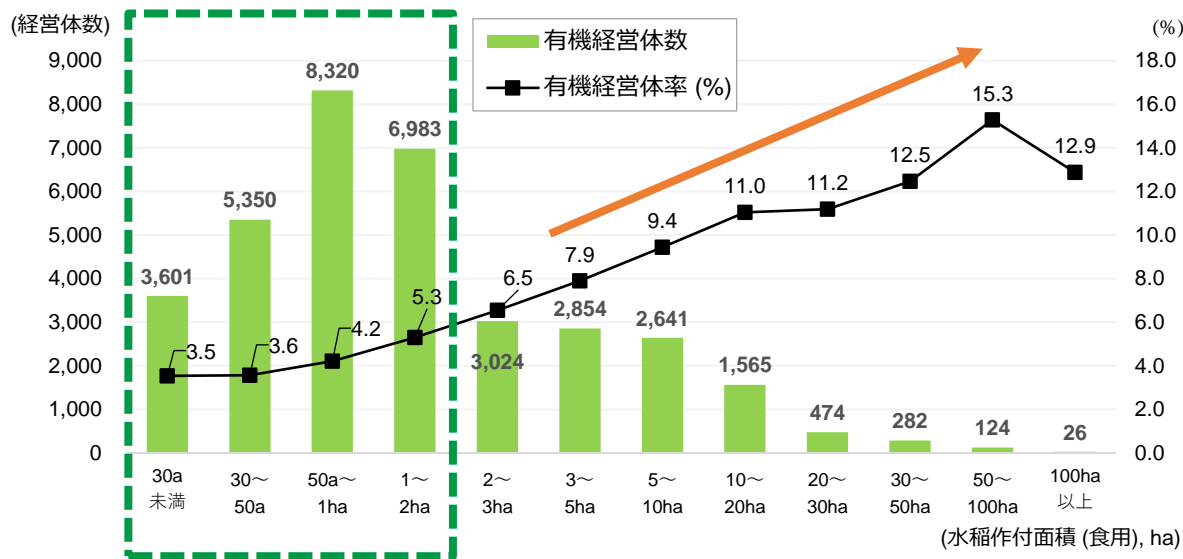


有機JASの格付けほ場等の把握方法とは異なる調査方法に基づくデータであり、分析・解釈する上で留意する必要。

3

有機農業を実施する農業経営体と 経営規模との関連

【水稲】有機実施有無と作付面積規模



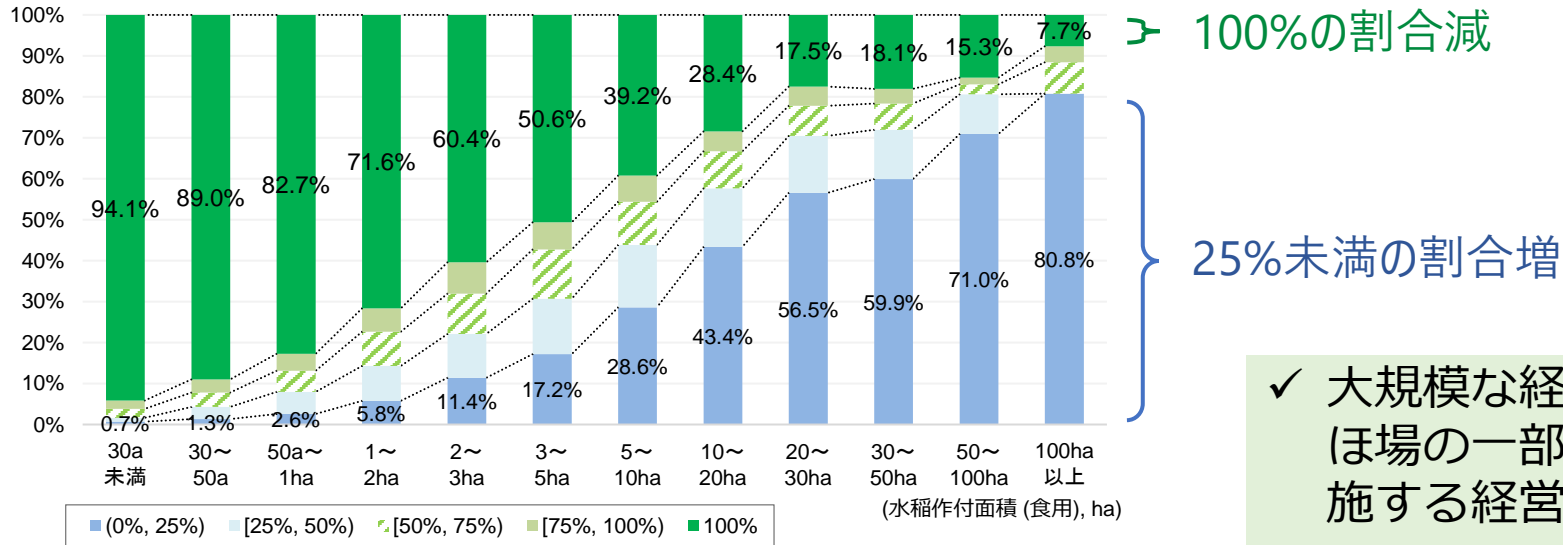
資料：2020年農林業センサス個票からの集計結果。

第7-4図 水稲（食用）の作付面積規模別有機農業実施経営体数

✓ 大規模なほど、有機農業を実施している経営体の率（有機経営体率）が高い
 （※100haを超える場合は、頭打ち、もしくはむしろ減少）

✓ 有機を実施する経営体のボリュームゾーンは、2haまでの層
 （合計して全体の約7割）。

【水稲】 作付面積に占める有機面積率



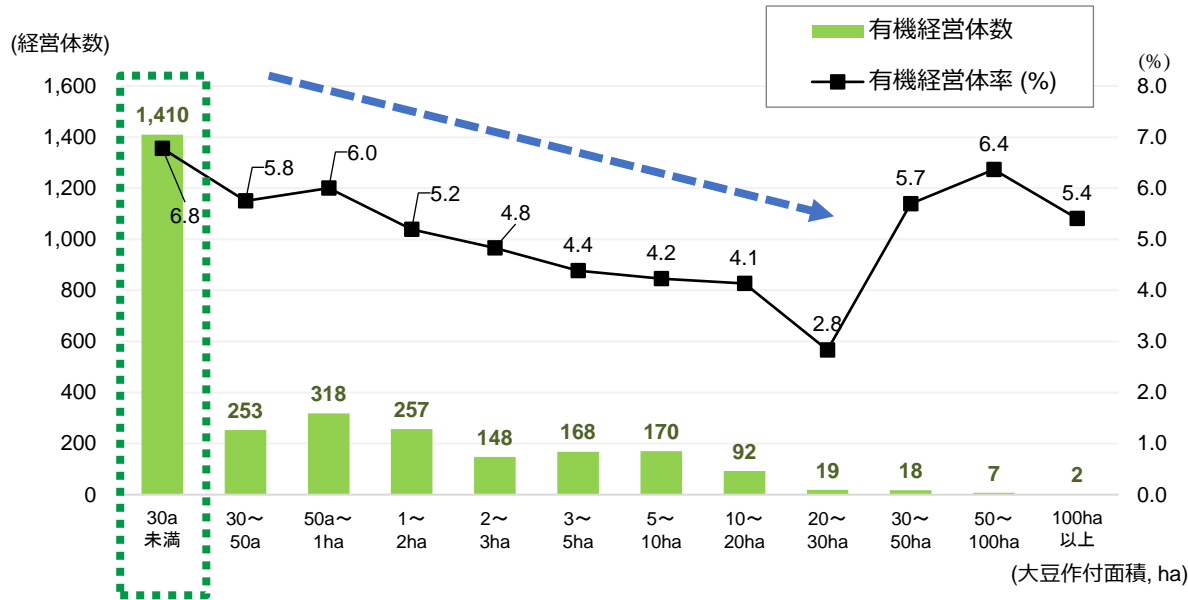
✓ 大規模な経営体では、作付ほ場の一部で有機農業を実施する経営体が多い

資料：2020年農林業センサス個票からの集計結果。

第7-5図. 水稲（食用）の作付面積規模と有機面積率（水稲・有機経営体のみ）

水稲では、大規模の経営体ほど、有機農業に取り組む経営体の割合が高いが、作付面積の一部で有機農業を実施。

【大豆】 有機実施有無と作付面積規模



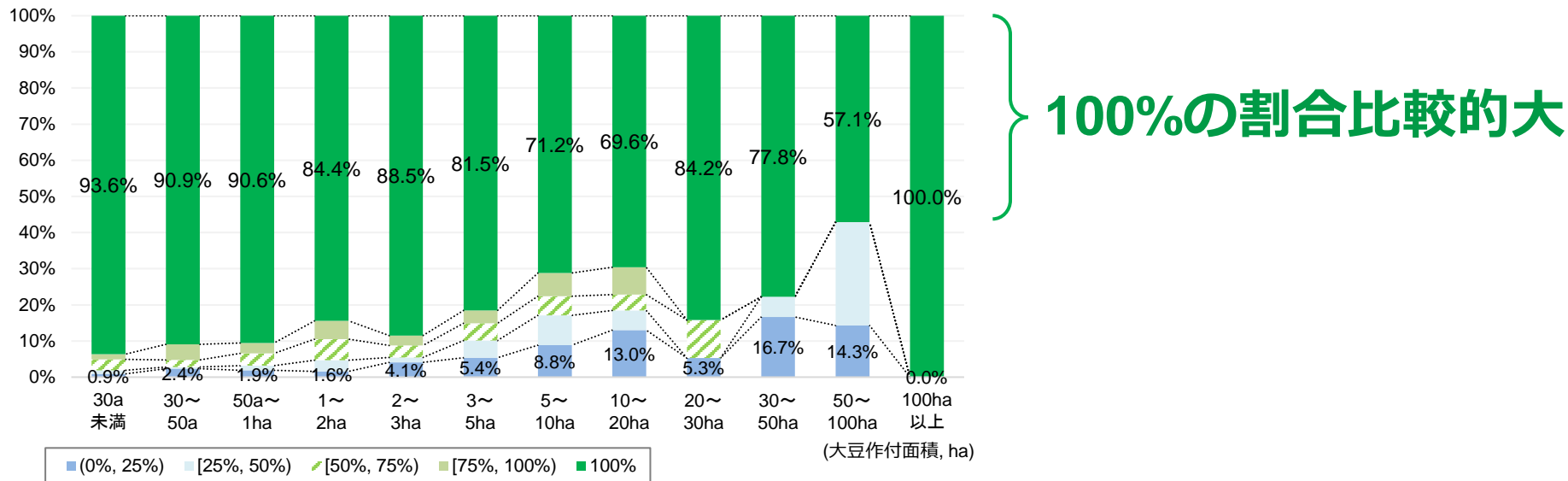
資料：2020年農林業センサス個票からの集計結果。

第7-6図 大豆の作付面積規模別有機農業実施経営体数

✓ 大規模なほど、有機農業を実施している経営体の率（有機経営体率）が緩やかに低く（※規模別経営体数の少ない30haを超える層を除く）

✓ 有機を実施する経営体が最も多いのは、30a未満層（全体の約5割）

【大豆】 作付面積に占める有機面積率

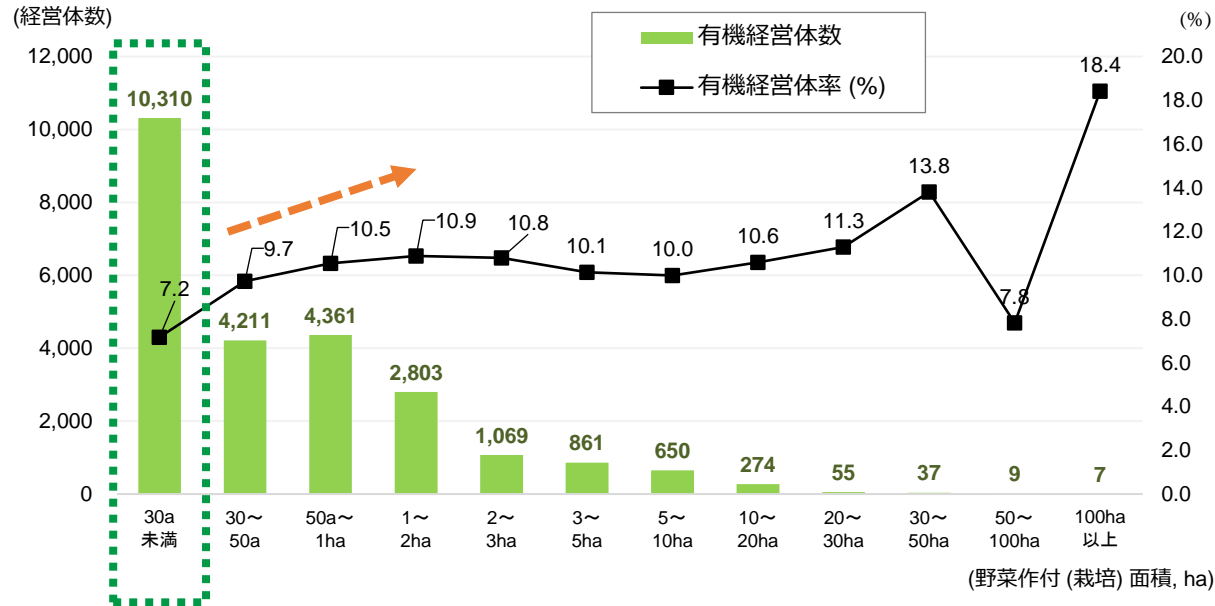


資料：2020年農林業センサス個票からの集計結果。

第7-7図. 大豆の作付面積規模と有機面積率（大豆・有機経営体のみ）

大豆では、大規模の経営体ほど、有機農業に取り組む経営体の割合が低いが、作付面積の全体で有機農業を実施する割合が規模を通じて比較的高い。

【野菜】 有機実施有無と作付面積規模



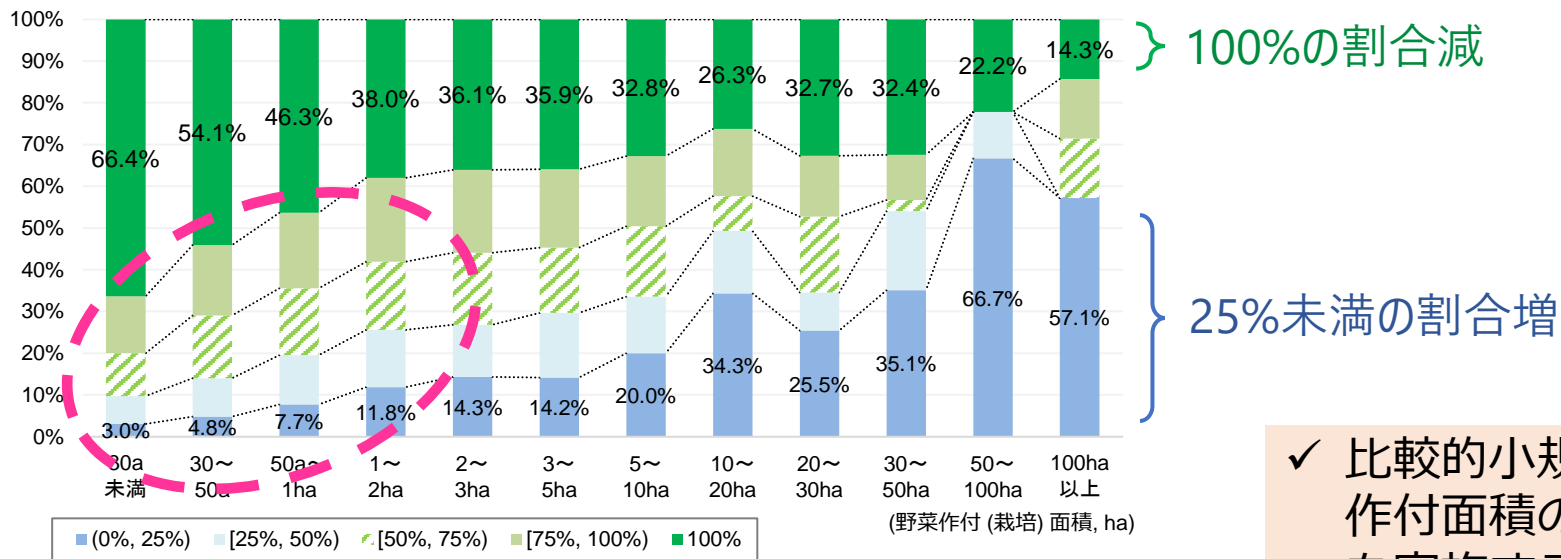
✓ 大規模なほど、有機農業を実施している経営体の率（有機経営体率）がやや高い（※1ha前後から頭打ち）

✓ 有機を実施する経営体が最も多いのは、30a未満層（全体の約4割）

資料：2020年農林業センサス個票からの集計結果。

第7-8図 野菜の作付面積規模別有機農業実施経営体数

【野菜】 作付面積に占める有機面積率



✓ 比較的小規模でも、
作付面積の一部で有機農業
を実施する経営体が存在。

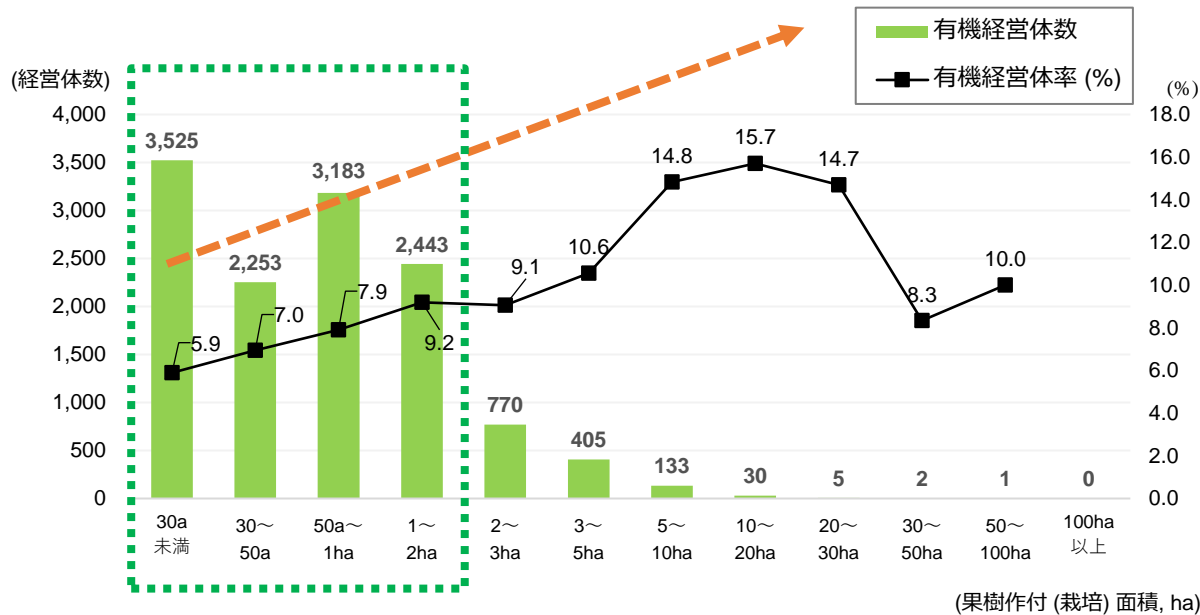
資料：2020年農林業センサス個票からの集計結果。

第7-9図 野菜の作付面積規模と有機面積率（野菜・有機経営体のみ）



野菜では、大規模の経営体ほど、**有機農業に取り組む経営体の割合が高いが、作付面積の一部**で有機農業を実施（ただし水稲よりやや緩やかな関係性）。

【果樹】 有機実施有無と作付面積規模



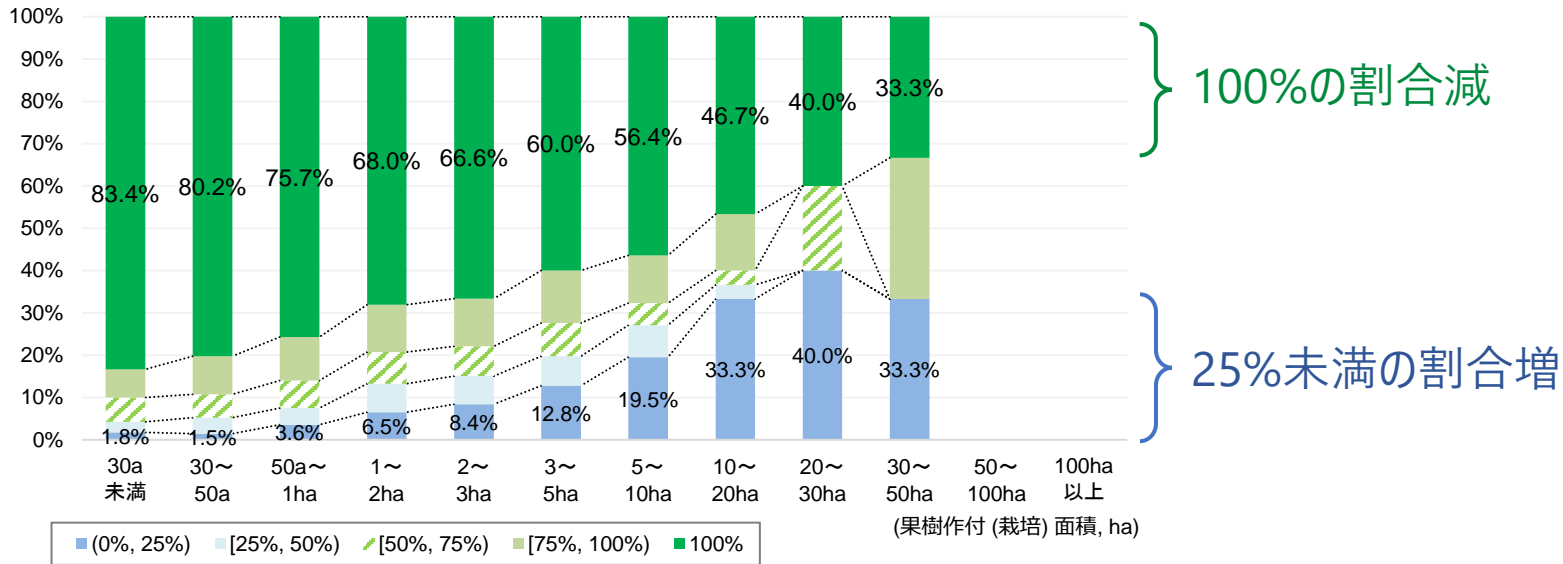
資料：2020年農林業センサス個票からの集計結果。

✓ 大規模なほど、有機農業を実施している経営体の率（有機経営体率）がやや高い
 （経営体数は少ないものの、20ha規模程度から頭打ち）

✓ 有機を実施する経営体のボリュームゾーンは、2haまでの層
 （合計して全体の約9割）

第7-10図. 果樹の栽培面積規模別の有機経営を行う経営体数

【果樹】 作付面積に占める有機面積率



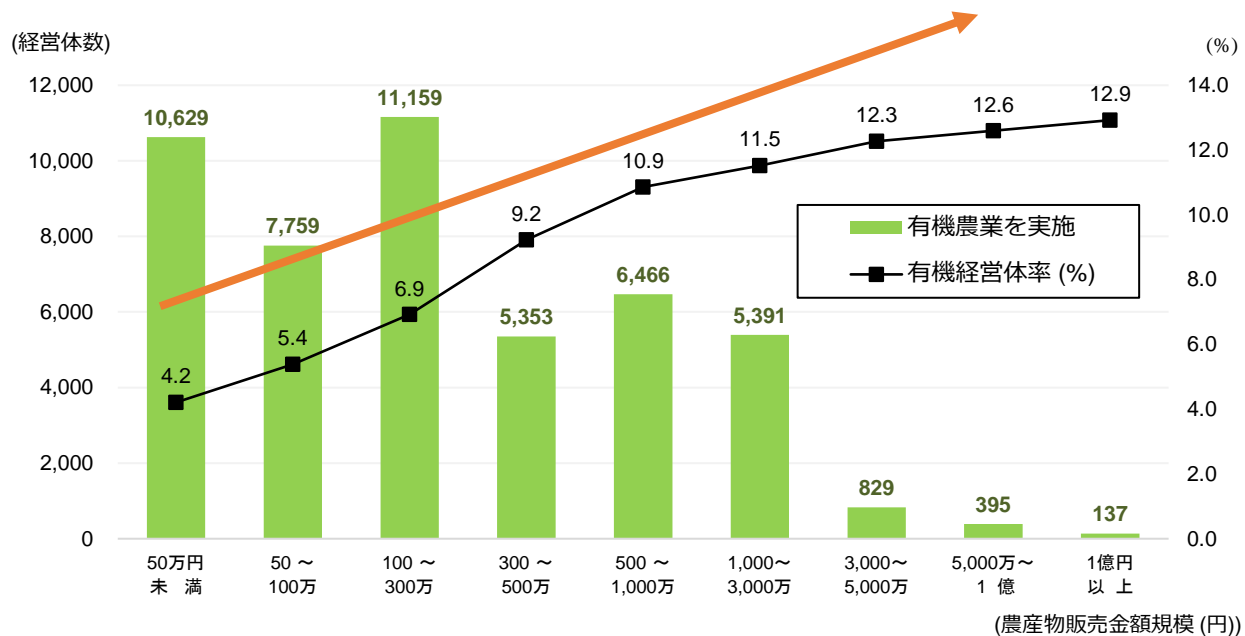
資料：2020年農林業センサス個票からの集計結果.

第7-11図. 果樹栽培面積全体に占める有機面積の割合（果樹・有機経営体のみ）



果樹では、大規模の経営体ほど、有機農業に取り組む経営体の割合が高いが、作付面積の一部で有機農業を実施する割合が高くなる。

農産物販売金額規模と有機実施有無



✓ 農産物販売規模が大規模なほど、有機農業を実施している経営体の率（有機経営体率）が高い

資料：2020年農林業センサス個票からの集計結果。

注． 水稲・野菜・果樹の3部門を合計したものが農産物販売金額の10割を占める経営体（732,940経営体）のみ。

第7-12図 農産物販売金額規模別の有機農業実施経営体数

4

おわりに

(1) まとめ

- ✓ 作物によって異なるが、作付（栽培）面積**規模が大きいほど、有機農業を実施する傾向**（一定規模を超えると頭打ち）
- ✓ 有機農業に取り組む場合も、規模の大きな経営体では、**作付（栽培）面積の一部で有機農業を実施**する傾向
- ✓ 以上の傾向は大豆は例外。
- ✓ **農産物販売額規模でも、大きいほど有機農業を実施する傾向。**
 - + JAS認証面積に比べて大きい面積（11.5万ha）とはいえ、目指す100万haに比べると、はるかに小さい面積。



有機農業に取り組む**経営体数**が増加するよう取り組むとともに、**各経営体での有機農業実施面積を拡大**できるような後押しも重要。

引用文献（報告書内で示したものを除く）

- ▶ 農林水産省（2021）『みどりの食料システム戦略参考資料』（*報告書における [農林水産省 (2021c)]）
<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/midori/attach/pdf/team1-153.pdf>（2023/1/30アクセス）。
- ▶ 農林水産省（2022）『第2回 2025年農林業センサス研究会における委員意見に対する見解及び対応方向について（第3回2025年農林業センサス研究会 配付資料）』
<https://www.maff.go.jp/j/study/census/2025/221108/attach/pdf/index-1.pdf>（2023/1/30アクセス）。
- ▶ 農林水産省（2023）『有機農業をめぐる事情（令和4年7月）』
<https://www.maff.go.jp/j/seisan/kankyo/yuuki/attach/pdf/meguji-full.pdf>（2023/1/30アクセス）。
- ▶ Willer, Helga, Bernhard Schlatter and Jan Trávníček (Eds.) (2023) *The World of Organic Agriculture. Statistics and Emerging Trends 2023 (online version 2 of February 23, 2023)*, Research Institute of Organic Agriculture FiBL, Frick, and IFOAM – Organics International, Bonn.

ご参加いただきありがとうございました。

プロジェクト研究資料
本文 (pdf) はこちら



<https://www.maff.go.jp/primaff/kanko/project/R05census.html>

報告資料
掲載ページはこちら



<https://www.maff.go.jp/primaff/koho/seminar/2023/index.html#20240220>